

西郷がどんなに「偉く」とも、
彼自身が、信頼を置くに足りぬ、
俺と色合いが違うと感じたら
桐野は、軽く西郷と別れていたのではないか。

彼のそういう主体性は、
土壇場になった時にもはっきり表われる。

西南戦争の最終章、
生き残りの薩軍が城山に立て籠もった時、
幕僚から西郷だけは助命嘆願をしようという意見が出た。

「西郷を殺されたくない」

弟子達の衷心から出た素直な気持ちであり、
心情的に分からないことはない。

現に、彼らはそれを試みている。

そういう幕僚達の中であって桐野だけは、
西郷もここで一緒に終わるべきだ
と言って譲らなかった。

彼は、別に西郷を道連れにしたかったわけではない。

「西郷の晩節を汚したくない」

というはっきりした意志があった。

桐野にすれば、それが西郷に対する恩返し、
最後の奉公のつもりだった。

そして、それが正解だったことは後の歴史が証明している。

西郷は、城山で自刃したことで、
その評価はいやが上にも高まった。
別に後世の評価の為に死ぬ必要もないが、
もし五稜郭の榎本武揚のように降下し

ゆるされていたらどうであろう。

本人が生きるに耐えられたとしても、
気分としては仕事どころではなく、
生き恥を晒すような惨めな余生になっていたであろう。

西郷の名誉の為に付け加えるが、
幕僚から自身の助命嘆願の趣意書を見せられた時、
彼は、

「開戦以来、何人死んだか」と問うたという。

それ以外は何も言わなかった。
言う必要もないほど愚劣な趣旨だと思ったからであろう。

その辺りを桐野ははっきり見通せていたのである。